皇典文彙と櫛田駿

倉野憲司

○

皇典文彙三巻三冊は、平田篤胤が校輯し、その男鉄胤が謹書して板行したものであるが、世にあまり知られてゐない書物である。巻頭に筑前侍読櫛田駿の撰に成る「皇典文彙叙」を掲げ、次に鉄胤の「皇典文彙序」を載せてゐるが、それらによつて本書編輯の動機や板行の事情等が知られる。まづ駿の「叙」に返り点・句読点を施して示すと、次の通りである。

皇典者何。皇朝之典也。典者何。先王之大経、而万古不レ容レ泯者也。文彙之書、曷為而作也。蓋自三天降二神聖一、皇統綿綿、代有二制作一。建二諸天地一、徴二諸庶民一、著為二旧事書紀一施為二律令格式一。懿訓淵謨、至矣盡矣。自レ是以降、書表序記之製、相継而出。雖レ有二体裁之殊一、然舂容大雅、亦皇典之流亜也。至二保平之乱一、兵燹相尋、礼典漸崩。延及二足利氏之季一、而壊乱極矣。大経不レ振、識者憾焉、此則斯書之所二由作一也。方今治教隆盛、自然合二符於往古一、著述文章、世不レ乏二其人一、尚有レ待二斯書之作一者何。以新進後生、狃二聞漢籍一、而皇朝古文、置而不レ講也。然則斯書而足歟。曰、此特其津筏耳。幼学之士、先読二斯書一、以識二其体例一、沿二其流一而溯二其源一、則皇朝之典、其亦庶二于不レ泯矣。彙二斯文一以誘二後進一者誰。江戸碩学伊吹廼屋先生也。

安政四年丁巳嘉平月

筑前侍読櫛田駿謹撰

さて右に述べてある所は、荷田春満の創学校啓に流れてゐる思想と相通じるものがある。即ち春満は、六国史や律令格式の書に神皇の道を求め、万葉集や古今集に大雅の道を求めたが、駿は、旧事紀や書紀、及び律令格式を以つて懿訓淵謨の至り尽くせるものとしてゐるのである。前者は神皇の教の陵夷と国家の学の廃墜を慨歎したが、後者は大経の不振を遺憾としてゐるのであつて、両者の思想には脈々相通じるものがあるのである。

いつたい櫛田駿といふ人はどういふ人であつたのであらうか。筑前侍読とあるから、福岡藩の儒臣であつたことは明らかであるが、その人物・学識・閲歴等の詳細は、福岡市の東公園にあるその碑文によつて知ることができる。この碑は「篤学之碑」といひ、文は宮本茂任（竹塾）といふ人が撰したものである。煩を厭はず、左にそれを掲げることにする。（福岡県碑誌、筑前部に拠り、便宜返り点を施す。）

櫛田先生、伴二読旧藩主二世一、恩遇殊厚、及三後輩追慕者、建レ碑以表二遺行一也、老少二公、賜レ金資レ成、且賜二篆額一、曰二篤学之碑一。実係二少公手筆一。衆推二茂任一嘱レ銘。茂任不二敢固辞一、以二嘗共レ職而求レ益也。先生諱駿、字子里、称二駿平一、別号二北渚陳人一。其家自二碩儒琴山子一、為二福岡儒臣一。考諱璞、妣千代氏、以二文化十二年十月二十二日一、生二先生於藩学官舎一。先生自二髫齔一入レ学、夙慧超レ衆。稍長遊二於江戸一、

入二古賀侗庵門一。門下穣二偉才子一。而先生以二少年一。才名煥発、業成而帰、学二華音於長崎一、与二清人沈萍香一結二文字交一。既帰充二藩学師員一。無レ幾超為二伴読一。居数歳、進レ班殊遇、兼二左右事一。二公参二幕府一、視二辺戍一、必従レ駕焉。居レ職凡二十余歳、蒙二褒賞一不レ可二勝数一矣。而身有レ病辞レ職、継而致仕。使二嫡蘊襲一レ祿、遂退二隠芦屋一、下レ帷授レ徒、従容自適、不四復知三世之有二栄辱一也。一朝中レ風興レ病而帰、以二明治五年四月四日一歿。享年五十八。配二高田氏一、生二五男一女一。長即蘊、第二第五出嗣二他族一。而第三四与二第二一早世、一女未レ笄。先生治レ経、一奉二洛閩一純如也。文章刻二意八家一、一字不二苟下一、斉藤拙堂評、為二自然之美一難レ施二刪正一也。所レ著朝鮮見聞録諸書。而続通鑑綱目弁解、広捜旁索、鑿々有レ拠。亦可三以見二篤学之一斑一矣。先生為レ人、温和坦夷、雖二門人小子一、得二親近一レ之。飲レ酒而酔、輒拍レ撃歌嘯。二公恩遇之渥、固出二於輔導之功一、而其風度尤二公之所レ弗レ諼也歟、銘云、

厥貌也粛、厥質也温、厥説レ経也、後進啓レ惛。唯学之殖、有二固厥根一、発為二枝葉一、要而不レ煩。琴山之出、有二斯後昆一。爰受爰継、以昌二厥門一。

櫛田駿といふ人は、おほよそ右のやうな人物であつたが、彼と平田一門との関係は明らかではない。しかしながら篤胤の「皇典之彙」に叙を寄せた事実から推せば、駿は国学にも相当の理会をもつてゐた人であり、その学門は、言はば国学的漢学であつたやうである。彼が皇典文彙の必要性を説いて、「新進後生、狃二聞漢籍一、而皇朝古文、置而不レ講也。」と慨歎してゐるのを見れば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。これは嘗て春満が、「国学不レ講、実六百年矣。……先生之風払レ迹、前賢之意近レ荒。」と歎いたのと、精神において相通じるものがある。しかしながら、彼は皇典文彙を以つて足れりとはしなかつた。それは幼学の士の皇朝古文の体例を識る津筏に過ぎないのであつて、その流れに沿ひ、その源にさかのぼつて、皇朝の古典そのものを究めることが、終局の目的であつたのである。そこには皇典文彙に対する正しい価値批判が行はれてゐるといふべきである。

○

さて眼を転じて鉄胤の序を見ると、それは次の通りである。

老子曰。執二古之道一。以御二今之有一。能知二古始一。是謂二道紀一。蓋欲レ知二古始一乎。不レ可レ不レ読二皇朝諸典一也。欲レ知二諸典之体裁条例一乎。不レ可レ不レ読二其序表一也。是我父之教也。若下夫搢神先正諸文。可二以執レ古御レ今者上。亦隷以為二三巻一。強為レ之名曰二皇典文彙一。既以授二家童一。而誦二習之一。門下之士亦往往請レ益。於レ是乎。恐二其魚魯一省二其繕写一。乃命二鳩工一。而奏二其功一也。夫欲レ知二我古道之紀綱一乎。亦不レ可レ不レ読二此書一也。言レ之以冠レ之。

天保八年丁酉正月　　平鉄胤謹序

右によつて本書校輯の目的及び板行の事情は明らかであるが、篤胤の考は、古始を知るためには皇朝の諸典を読まなければならない。諸典の体裁条例を知るためにはその序や表を読まなければなら

ないといふにあつた。かくて彼は皇典の序表等を重視して、これを三巻に輯め、以つて古道の紀綱を知らしめようとしたのである。このやうに純粋の漢文で記された諸典籍の序や表を重んじたのは、たしかに篤胤の一見識であつて、春満・真淵・宣長等の思ひ及ばなかつたところである。特に宣長が古事記の序について、「今此序を註するに、ただ文章のかざりのみに書るところは、ただ一わたり解釈(トキ)て、委曲はいはず。其はみな漢ことにして、要なければなり。」とした態度と比較したならば、両者の逕庭のいちじるしいことが知られるであらう。

然らばかうして輯められた皇典文彙三巻は、どんな組織内容であらうか。左にその目録を示すことにする。(原本には目録が無い。従つてこの目録は筆者が作つたものである。)

皇典文彙巻之一

○古事記序　太安万侶朝臣
○上三続日本紀一前表　藤原継繩公
○上三続日本紀一後表　菅野真道卿
○日本後記序　藤原緒嗣公
○続日本後紀序　藤原良房公
○文徳天皇実録序　藤原基経公
○三代実録序　藤原時平公
○日本書紀跋　清原国賢朝臣

皇典文彙巻之二

○令義解序目　太政官符　式部省　応レ撰二定令律問答私記一事
○上三令義解一表　清原夏野公
○令義解序　清原夏野公
○弘仁格式序　藤原冬嗣公
○修格式事　藤原三守卿
○奉三進貞観式一都序　藤原氏宗公
○弘仁内裏式序　藤原冬嗣公
○弘仁内裏式跋　清原夏野公
○貞観格序　藤原氏宗卿
○延喜格序　藤原時平公
○上三延喜格式一表　藤原忠平公
○延喜式序　藤原忠平公

皇典之彙巻之三

○上三新撰姓氏録一表　万多親王
○新撰姓氏録序　万多親王
○上三大同類聚方一表　安部真直朝臣
○新撰万葉集序　菅家
○古今倭歌集序　紀淑望朝臣
○倭名類聚鈔序　源順朝臣
○名目鈔序　藤原実熙公

この目録を一見して誰しも気づくことは、巻一は歴史に関するもの、巻二は法制に関するものを輯め、巻三は姓氏・医術・文学・言語等に関するくさぐさのものを輯めてゐることである。即ち、皇典文彙は類を以つて編輯されて居り、且つ殆ど勅撰の書に限られて、

それが年代順に配列された整然たる組織をもつてゐることが知られる。もとより大半は序か表であるが、稀には跋・太政官符・詔等をも採輯してゐる。これは歴史及び法制の類において欠くべからざる重要な意義を有するものとして收めたものと思はれる。

ところで巻一を見ると、古事記の序から始まり、六国史の表序に及んでゐる。ただ日本書紀は当然古事記の次に置かるべきであるが、序表共に存せず、跋も遥か後世のものであるために、三代実録の次に配列したものと推測される。しかしながらここには皇典としての史書が尽くされてゐるのであつて、それらの序表跋を明らめることによつて、わが国史書の精神並びにその大要を窺ひ知ることができるのである。巻二は律令格式に関する主なものが挙げられてゐる。従つてそれらを読むことによつて、わが国法制の精神並びに本質は自ら明らかとなるであらう。巻三は雑の部であるが、新撰姓氏録以下のものが、なぜ採輯されたかは、篤胤の学問を知る人には直ちに頷かれることと思はれる。否、「古史徴開題記」ただ一部を読んだだけでも、皇典文彙三巻の内容の必然性がわかるであらう。ただ一つ不審に思はれることは、「広成宿禰の古語拾遺を見て泣き慨み、古道を明らめむと思ふ志の興起(オコラ)ざる人は、道々しげに物言ふとも、信には神恩国恩を思はざる、空気学(ウツケビ)の人とや言まし。」とまで揚言した「古語拾遺」の序と跋とを、篤胤はどうして採録しなかつたかといふことである。大いに疑問であるが、その理由を今は知る由もない。

ともあれ、篤胤の思想は宣長・真淵を隔てて春満につながつてゐるのであり、従つて皇典文彙は創学校啓の流れに沿ふものと言つても過言ではあるまい。

――本学文学部長、文博――

目加田さくを編『平仲物語』

倉野憲司

目加田助教授（九大教授目加田誠博士夫人）が、このたび静嘉堂文庫藏の「平仲物語」を影印に附すると共に、これを忠実に飜字して頭註を加へたテキスト版を、武藏野書院から公刊されたことは、まことによろこばしい限りである。目加田さんは、先年既に「平仲物語註釈」、「平仲物語論」の好著を刊行されて居り、平仲物語のすぐれた研究者として、斯界に認められてゐる人であるが、さうした平仲物語に造詣の深い人の手に成つた本書は、テキストとして最も信用してよいものと思はれる。

静嘉堂文庫に秘藏されてゐる平仲物語は、唯一の祖本であつて、昭和十一年に同文庫から少数部数が複製頒布されたが、その複製本すら、今日は稀覯書となつてしまつて、研究者は甚だしく不便を感じてゐた。それをこのたび見事な影印版として、冷泉為相の麗筆の風姿生韻の妙趣さながらを、容易に味はふことができるやうになつたことは、何よりの仕合せである。飜字も極めて忠実に行はれて居り、且つ活字も大きく行間にもゆとりがあるので、非常に読み易く、頭註も要を得てゐてテキストとしては申し分のないものと言へるのである。

本書は研究者にとつての福音であるばかりでなく、大学における演習用として、また一般の講読用として好個のテキストである。敢へて無言を陳ねて江湖に推奨する所以である。

（桝形本二〇七頁、定価三〇〇円）